池田城に石垣

城の進化みるうえで貴重な遺構

戦国の世に摂津の雄として活躍した池田氏が築いた池田城。建武のころから天正に至る約240年間、池田に城がありました。

池田城が築かれた「池田」は、大阪から20キロ㍍のところにあり、当時、摂津の国に属していました。

大阪はかつて河内国、和泉国、摂津国の東の一部からなる地域で、大阪湾に面した大阪平野を中心に、周囲を半月形に北摂、生駒、金剛の各山地が取り囲んだ比較的単純な地勢を示していました。古代以来、飛鳥、奈良、京都など、政治の中心地に近接していたため、中央政治の変動が直接及び、中央の抗争がそのまま、大阪を舞台に繰り広げられることが多くありました。

とりわけ、60年にわたる南北朝の動乱時代や戦国時代の激烈な争乱期、また、織田信長、豊臣秀吉の出現を経て、中央統一政権である江戸幕府の成立へと移行する時代の大転換期には、大阪地方の城をめぐる戦争と政争の歴史は、中央政権の動きと直接重なり合って展開されました。

池田城が池田の地にあって、これら戦乱の歴史を刻んだのが、ちょうどこの時期だったのです。

幾多の合戦の中で何度か落城の憂き目にあいながら、そのつど再興され、摂津に堅城の名を誇った池田城も、戦国の動乱にほんろうされ、天正年間にその命脈を断たれてしまいます。しかし、池田氏が築いた池田城は、その後の池田が発展していく礎となります。江戸時代には幕府の直轄地(天領)となり、池田文化が花開き、産業が進展したのは、池田城があったことと深いかかわりをもっています。

「池田」という地名由来の有力な説の一つともなっている歴史の遺産・池田城跡をなんとか保存しようと市は、かつて城主が居住していた主郭部分を平成元年度に購入。本市のシンボルとして、また、地域文化創造の核となるよう、城跡を生かした公園に整備することを決めました。これに伴い、市教育委員会は昨年度から3カ年計画で、城跡の発掘調査を進めています。

昨年度の調査では庭園跡、井戸、建物跡などを確認しました。今年度は池田城の最も新しい段階の姿を明らかにするため、約800平方㍍を対象に調査を進めました。主郭の北東側にある土塁に土留めのため施された小規模な石垣が見つかりました。また、未解決だった主郭への虎口(入口)の位置と形を確認したほか、建物の礎石、主郭の雨水を排除するための溝などが見つかりました。このほか瓦や中国産の磁器、銅銭、国内産の陶器などが出土しました。

ここでは、今回の調査のあらましを報告します。

池田城は自然の要塞(さい)

池田駅から北へ約600㍍。桜、新緑、紅葉の美しい五月山の南側、閑静な住宅街の一角にスギ、ケヤキ、ムクなどが生い茂る小高い森があります。広さはざっと1万2千平方㍍。この森の北西端に「池田城跡」と記した標石が立っています。

池田城が築かれた「池田」は、猪名川が北摂山地を割って平野部に出た所にあたり、西国街道をはじめ能勢街道、余野街道など複数の街道がこの地で交差するなど、古くから交通の要衝として発展してきました。

地方豪族・池田氏の居城として、室町時代に築かれた池田城は、五月山を背に、東西に延びる標高50㍍前後の丘陵上にありました。東は堀によって区切られており、北は幅の広い大きな谷となり、五月山から杉ケ谷川が流れ出しています。西側は市街地との間が段崖ともいうべき急な斜面になっています。南側は東の堀と自然の谷を結んで区画されていて、西南方向に視界が開け、軍事的拠点として最適の地にあったといえます。

これまでの調査によって、池田城は五月山を背にした主郭を北西奥にして、東、南方向にハシゴの形のように二重に堀を巡らせた城郭で、その規模は東西約350㍍、南北約550㍍、約19㌶に及ぶ広大なものであったと推定されています。

入口の発達は城郭進化の要(かなめ)

空堀を橋で渡り入ったと考えられる虎口(入口)が、主郭の東南隅で見つかりました。

入口から堀沿いに幅約2・5㍍の通路が北へ延び、土塁に挟まれた間を通って主郭内へ入るようになっていました。

同時に、堀底を通路とし、堀の斜面を削って設けた道を上って主郭内へ入る、古い時期の入口も見つかりました。この通路の両側には、低い石垣が設けられていました。古い通路を埋め立てた土の中に、焼けた壁土が混じっていたことから、石垣の上に塀が取り付けられていたと考えられます。

新旧の入口と主郭内へ至るルートを比較すると、古い方は堀底を通り、一度折れるだけだったのが、新しくなると、入口の位置が南へずれ、二度カギ形に曲らないと入れない仕組になっています。どちらも敵の侵攻を防ぐための工夫がみられますが、新しい入口は、池田城全体の改修が行われたことを推測させるほどの大きな変化です。

城は立てこもって守るだけでなく、攻撃の拠点でもあります。

敵の侵入を防ぐため堀を掘り、土を盛った土塁を築きます。しかし、城の周りをすべて堀や土塁にしてしまうわけにはいきません。当然、入口は必要です。入口をつくると、敵もそこから攻め込むことができるので、城の中で一番弱い箇所になります。こういったことから、入口のつくり方には、かなりの工夫が凝らされてきました。

鎌倉から室町時代、武士が力をもつようになると、その拠点として多くの城が築かれます。初めのころの入口は、門を設けただけのものでしたが、しだいに土塁を食い違いに配したり、通路を曲げるなどの工夫がみられるようになります。

戦国時代になると、大名によって入口のつくり方に特徴がみられるようになります。武田信玄やその家臣の城は、入口の外側に三日月形の堀を掘って半円の空間をつくります。織田信長やその配下が築いた城では、通路を2～3回曲げ、入った所に空間を設け、侵入した敵を袋のネズミにして攻撃できるようにしています。

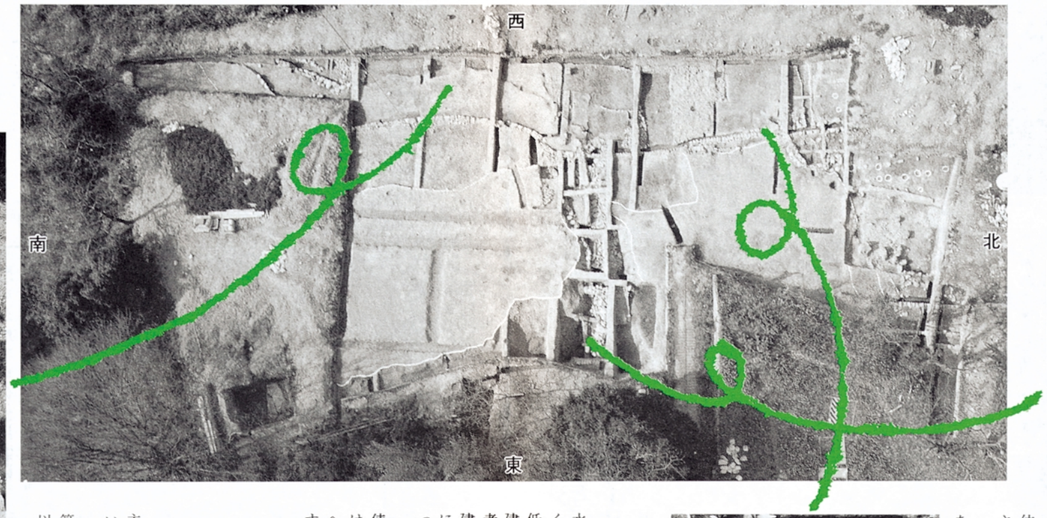
江戸時代はもっと複雑になり、大手門(城の正門)から天守閣への通路が、迷路のようになっています。

入口の発達は、城郭進化の要であったといえます。

現地説明会に250人

市教育委員会は、平成2年度の発掘調査成果を皆さんに見ていただくため1月26日、城山町にある池田城跡主郭部で現地説明会を開きました。

寒い中にもかかわらず約250人の歴史ファンが集まり、見つかった遺構、出土した中国製磁器や銅銭、瓦などの遺物を目で確かめながら、発掘担当者の説明に耳を傾けていました。



石組の溝 見つかる

建物群を取り巻くように、雨水などを排除するための溝がつくられていました。主郭内の高低差を十分に考慮し、計画的に建物の配置が決められたものと考えられます。今回調査した、建物跡の南を通る部分では、底に石を敷き、見栄えにも気を配っています。

この溝は、古い時期の通路を使ってつくった暗渠(地下に設けた水路)を通って、東側の堀へ流れ落ちるようになっています。

空中写真で 遺構を実測

発掘調査によって明らかになった、建物跡や溝などの遺構は、実測図や写真によって記録されます。この作業を怠ると、その成果は永久に失われることにもなるので、常に正確な記録が要求されます。

人の手によって、注意深く土を取り除くという発掘作業は、昔から変わりませんが、その成果の記録や出土遺物の保存処理といった分野では、どんどん新しい技術が導入されています。

最近では、空中からの撮影写真をもとに、コンピューターを活用して、図面化がなされるようになりました。こうした方法をとることによって、真上からの写真が得られるだけでなく、誤差のない正確な図面を作成することができるのです。

左の写真は、バルーンを使った池田城跡の撮影です。このほかにもセスナ機やヘリコプター、クレーンなどによる方法があります。

信長のバックアップで 石垣導入!?

主郭南側の土塁跡、入口から主郭内へ至る通路の両側で、低い石垣が見つかりました。

これらの石垣は16世紀後半に築かれたものと考えられ、それ以前にはなかったようです。

一般に、室町から戦国時代の城は、若干の例外を除き、石垣を備えていないとされています。しかし、織田信長の築城、あるいはその配下に組み込まれた城の多くには、石垣が見られるようになります。

池田氏と信長のかかわりをみると、永禄12年(1568)の池田城攻めがあります。城は戦火に遭いましたが、池田氏は滅ぼされることなく、信長の家臣に組み込まれました。戦で荒れた池田城を復旧するとき、信長方のパックアップによって、石垣が取り入れられたものと考えることができます。

では、なぜ、石垣が必要だったのでしょうか。16世紀半ばに伝わった鉄砲が、戦いの質を変えたことが考えられます。銃弾に備え、建物の外壁や塀を厚くする必要が生じるわけです。分厚い構築物をつくるためには、それに耐えるだけの土台が欠かせません。また、攻め入る軍勢を迎え討つとき、敵の頭上からの攻撃は有効で、そのためには垂直に立ち上がる壁面を必要としました。土を盛っただけでは垂直な壁面がつくれないばかりか、重い構築物を乗せることもできません。こういったことから石垣が採用されるようになったと考えられます。

初期のころは、入口や土塁など、部分的に施されただけでしたが、信長が築いた安土城では、すべて石垣が取り巻くようになっています。これが後に、近世の城へと受け継がれていきます。

池田城跡に見られる小規模な石垣は、城の進化をみるうえで貴重な遺構であるといえます。

近世城郭への過渡期の城

今回の調査で、池田城の入口の形とその変遷、16世紀後半に小規模な石垣が取り入れられていることが判明しました。

石垣の導入は、池田氏が守護大名・細川氏の家臣から、戦国大名である織田信長の家臣へ、という政治的な転換を迎えたことを意味するもので、池田城の歴史的な評価も大きく変わることになりました。

池田城を含め、中世から戦国の動乱期まで、大阪には400を超える城郭がありました。しかし、これらの城は相次ぐ戦乱の中で、落城と共に廃城となったものも多くありました。とりわけ、信長と三好三人衆、摂津、河内、和泉の国衆などとの戦いや石山合戦を通し、信長軍に破壊されたもの、豊臣秀吉の天下統一の過程で強行された城郭整理、いわゆる「城割り」によって多くの城が姿を消しました。およそ天正年間までに、中世城郭のほとんどが廃城と化しました。

これにかわって、大阪城や姫路城などのように重厚な石垣に高い城壁を巡らせ、豪壮な天守閣がそびえたつ、ごく少数の近世城郭が生まれていきます。

池田城は、中世の〝土の城〟から近世の〝石の城〟への過渡期にあって、その移り変わりを考えるうえで、貴重な資料と位置づけることができるようになりました。

池田氏とその時代

池田氏が摂津の有力な在地領主として、池田の地を拠点にしていたのは14世紀中ごろから16世紀後半で、時代区分では室町時代から戦国時代にあたります。

室町時代は、足利氏が京都・北小路室町に幕府を開いたことから始まります。その政治の仕組は、諸国の有力武士を守護大名に任命して治めさせ、京にいる将軍がこれらの大名をまとめ、将軍への権力集中を図るものでした。

しかし、実質的には守護大名の連合政権的な要素が強く、将軍は必ずしも守護大名を支配できなかったようです。大名同士の権力争いがしばしば起こり、ついには守護大名が将軍を暗殺するといった事件(嘉吉の変)まで起こります。

室町幕府の権力が無力化したのは応仁元年(1467)、細川勝元と山名宗全との間に起った応仁の乱です。この乱の後、家臣が主君を倒してその権力を奪い取る「下剋上」の風潮が生まれ、それまでなんとか保たれていた政治の仕組が崩壊してしまいました。

当時、守護大名の下には、その代理として領国の支配を行う守護代、郡程度の範囲を治める国人と呼ばれる人たちがいました。池田氏もこの国人と呼ばれる階層に属していました。守護大名は複数の国人によって支えられていましたが、将軍と守護大名との関係同様、固い主従関係が結ばれていなかったようです。応仁の乱後、守護大名同士の権力争いが起きると、国人もこれに同行して争いに加わりましたが、自分の主君である守護大名の内部分裂を導くような、反逆的行動も頻繁に起こるようになりました。国人の中には、主君の支配に捕らわれることなく、自分が治める領地内の土豪や有力な百姓との結びつきを強めたり、高利貸などによって、財力を蓄える者もありました。特に、池田氏がいた摂津や丹波では、守護大名であった細川氏との支配関係が不安定であったため、こういった国人の動きが顕著で、池田氏のほか伊丹氏、丹波の波多野氏などは急成長を遂げました。

しかし、これらの国人たちも、織田信長の畿内攻略で打倒され、あるいはその支配下に組み込まれ、ついに戦国大名へとのし上がることができず、消え去りました。